
最弱の英雄伝

かぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱の英雄伝

【Nコード】

N7682Y

【作者名】

かぼちゃ

【あらすじ】

そこはふつうのせかいのはずだった
しかしある日

勇者に騎士、狼男、魔法使い、超能力者にバンパイアなど人間
の非科学的才能っていう才能が開花し始める

そんな中元々非科学的な才能を売りとしていた占い師や手品師はガ
ンガンすたれていく

何と言ってもそんなことは結構な人が出来るようになってしまった
のだ

そんな時、呪術師の家に生まれた黒独 尊がそんな奴らに嫌がらせをするためだけに才能を開花させたものが集い才能を磨く大学に入学する

プロローグ

いきなりだが少し昔話をしようか

ここ数十年のことなんだが宇宙人が飛来してきた
いや待って閉じないで私だってわかってる意味わかんないって
だけど降ってきたんらしいやうがない

しかし宇宙人の飛来は地球人の本来の力を発揮させた

魔法使いに超能力者、忍者に騎士に狼男にバンパイア
そんな奴らになる人間が現れた

宇宙人も度肝を抜かれただろう
私だってそうだ

家が高貴な家系なのは知っていた
しかし私が騎士になるとは

生存本能がトリガーだったのかもしれない
うちゅう人に襲われたときわたしは剣が地面から生えてきて
気付けばそいつらを一人残らずたおしていたのだ

他のところもだいたいそうだったらしい
今では約8割の人間が能力者だ
そっついわれるのを嫌われる奴もいるが

これによって人類は持つ力がそのまま序列になった
一般階級である私はこの騎士の絶対的な力によって
王族に準ずる身分となった

「お嬢様、そろそろ学園に向かう時間でございます」

「うむ、遅れてはいけないな、さっそく登校しよう」

「ちっ成金が」

「今舌打ちしなかった？」

「いいえ」

わ、私偉いんだけどなー

ちなみに彼女は国から支給されたメイドさんであり私の世話をしてくれる

たしか彼女も能力者だと聞いている

なんだか忘れてしまったが確か紹介の時の資料に書いてあったはずだ

「私、お嬢様と比べると非常に劣る能力ですがケルベロス憑き、獣化でございます」

この人思考読みの能力じゃないのだろうか
なんか怖いんですけど

プロローグ（後書き）

よろしく願います
記念すべき第一話！！

第一章、不幸な女の子

ここは才能のあるものが集う大学

その始業式である

私、鈴木 サチはこの超有名校に受かったのだ

試験は超がつく難易度である

試験とは基本学科試験である

合格点は600点ほかの学校とは違いこれを超えれば必ず入学できる

しかし学科試験の満点は600点

大学の試験で満点などとれる人間はまずいないだろう
とれたとしたらその人は能力者だ

実はこの試験の前に能力の点数を決められる

その点数が学科試験の点数に追加されるのだ

例えば私の能力は見えないものを見る力、点数は260点

ちなみに学科試験は397点だ

自慢じゃないが平均点180点のテストである

見えないものって何かって？

なんか人が能力を使うときの波？みたいなもんが見えるだけである
それだけで260点まったくいい世の中だ

ちなみに炎を口から出す超能力者の人は820点

魔法使いは1200点

主席の人は確か「聖なる騎士」という能力で

8万と6千点だったはずだ

私の努力はなんなのだという話である

今その人のが主席の挨拶をしている

何という波だろうかこんな濃い色は見たことがない
ってかまぶしいな真っ白な波だよ

だけど私の興味はそこじゃない

能力持つてる人って怖いし

友達がほしくてあまり能力を持っていなさうな
つまり波が見えない人を探していたのだが
前に座っている人が波がほとんど見えないのだ

いやかすかに黒い渦がどよめいているみたいだけどかなり薄い
これはいける

ちよつと男の子ってところがハードル高いけど
勇気を出して声をかけてみよう

この時は知らなかった

この人が下手な能力者よりも全然厄介な人だってことを

第一章、不幸な女の子（後書き）

みんな大好き鈴木サチさん登場回でした
ごめんなさい次から主人公出します

呪術師

> 章Ⅱ 呪術師 <

俺の家は呪うことを仕事にしている
藁人形とか作ってるわけだ

特別な力なんてない
恨めしいあいつを転ばせるくらいしかできない

だけど俺は許せなかった
呪いなんて信じなかった人間が魔法や超能力を
いきなり出来るようになって
前からいた俺たちみたいな奴の力は相変わらず信じようとしないう
てことに

この悔しさがわかるか？

いま俺は能力を開花させた奴らが集まる大学に編入した
ここで俺の力を見せつけてやる
たとえば何も見せつけるものがなくなったら

どうやってここに俺が編入できたかって
手品を見せてこれが俺の能力ですって言ったら
180点ももらえた

勉強なんか全然簡単だった
悔しさをばねに勉強したのだ

「あのーすいません
わ、わたしえつと、こんにちわ？」

誰だ、俺は能力持った奴と仲良くなかならないと決めているんだが
どうやって切り抜けようか

「あれ、聞こえませんでした？
お、おい」

無視だ無視

「私そんな強くないっていうか
たいした能力持ってなくて仲良くなれる人搜してて、、」

いや、お前にはきっと鉄のハートとかいう能力がありそうなんだが
なんでこいつ一人で話し続けられるんだ
だが能力を持ってないのか、、

「こんちわ」

返事を返す

「わ、喋った
あ、こんにちわ」

「・・・」

「・・・」

これは俺が返さなくてはならないのだろうか
そもそもこいつは誰だ

そんな時スピーカーから放送が入った
どうやらあいさつが終わったらしい

「毎年のことですが、入学者が定員を割ったので
今から最後の試験を始めます」

「ただ今から、レクリエーションとして
配布した学生証を奪い合っていたいただきます
今から6時間後に2つ以上の学生証を持っていた方を合格とするの
であしからず」

なんだそれはお前らが適当な入学試験をするからわるいのだ
そんなこと一言も聞いてないぞ

これはやばい

俺は何もできないじゃないか

呪いってのは数日前から準備してやつと
相手を転ばせる位の力なんだ

呪いのわら人形は作ってあるが名前がないと使えないし
もし使ってもかすり傷を負わせる程度しかない

まだ目的は何も達していないのにこんなところで
リタイアなんて御免だ

「に、逃げましょう

ここにいたら死んじゃいますよ」

さっきの奴が俺のをにぎってひっぱりあげようとする
さすがにそれはないだろうと思っっている

なんだあれは

竜が炎を吐いている
召喚術ってやつか？

「ここにいたら丸焼きですよ!!」

いやそんな馬鹿な
だが俺は能力者ってのをなめてたかもしれない
もうズボンが焼けた

俺たち体育館の外に出た
そういえば気になることがあった

「なあなんで俺のことを助けようとするんだ」

「私が教えてほしいですよ!!」

「なんだそれは」

呪術師（後書き）

次回！！

ついにバトルが来るかも！！

でもバトルって何をするんだ！！

敗北

<敗北>

体育館を出た俺たちが選べる道は3つ

校庭か校舎かまたこの学校の周りを囲むように生えている林の中から学校の敷地外はさすがにまずいだろう
そもそも2つ以上の学生証の所持となると学生から学生証を奪い取る必要がある

「あの、私考えたんですけど」

そもそもそれは可能なのか？
成功するビジョンが全く浮かんでこない

「やっぱり単純な力じゃあなたも私もかなり不利だと思っんです」

どうすればいい
切れるカードがない
せめて準備する時間と材料があれば
いやここの学生には通用しないか

「泣きたい・・・」

そういえばこいつがいたな
なんで涙目なんだ？

「よし、とりあえず校内に行くぞ」

ぱあっと花が咲いたような涙目から笑顔になる
なんだこいつは忙しい奴だ

「あ、私もそう思っていました
あまり派手な攻撃は出来ないですし
私たちはそもそもそんなことできませんね
まさにノーリスク・ハイ・リターン
そうと決まれば急ぎましょう」

いきなり饒舌だな

「そもそもなんでそう思うんだ？」

「はい！なんでしょう
何のことですか？」

「だからなんで俺に派手な攻撃が出来ないと思うんだ？」

すこし不意を突かれたような顔をするが
別段隠すようなことでもなかったらしいすぐにこたえてくれた

「私は超能力者なんですよ」

おい、能力ないって言っていたじゃないか
嘘ついてたのかよ

「私見えるんです
その、力！みたいなのが？」

「なんだそれは？」

力！とか言われてもな・・・

「えっと魔法使いに会ったことあります？」

無いが、今言うのはなんか癪だ

「私はまず魔力が見えるんです

こう一人でファミレスいたりすると

あ、あの人魔法使いだってわかるんです」

なんか誇らしげだがお前一人でファミレスいくのか・・・

「おい、そこのお前たち！

おいらの名前は駄足駿だ！！」

誰だこのもつさりした坊主頭は

「な、なんですかいきなり私は鈴木サチです！」

あ、そこ自己紹介するのか

「お前たち学生証は持っているか

悪いが置いていけ、そうすれば痛い目見ずに済むさ」

持っているがわざわざそれを言う馬鹿はいないだろう

「持ってますけど、おいていきません！」

馬鹿なのかバカなんだな

「おい駄足、悪いが黙って渡すわけにはいかんだがどうだろう、手を組まないか、こうしてケンカを売ってくるってことは

そこそこ強いんだろう？」

「問答無用！！」

駄足は右足を大きく踏み出す

そして膝に両手を乗せる

だがあいつからここまでの距離は5メートルはある
攻撃など仕様がなはずだ
何か力があれば別だが

「き、来ますよ！」

なんだと聞く暇などなかった

よけようとする暇などなかった

その声が届くころには

すでに駄足は俺の胸にタックルしていたのだ

それもたった一步で5メートルもの間を詰められたのだ

肺の中の空気を吐き出させられる

俺は舐めてたのかもしれない

なんだこれは

俺は自分のことが特別だと奢っていたのかもしれない

俺の家のことを馬鹿にして、恐れて、化け物だのいろいろ言われてきたが

こういうやつが化け物というんだ

なんでこいつらは英雄で俺たちが化け物なんだ

「おいらの力は黄金いっしゅんのまたたきの右足
右足の力を大幅にあげられる超能力者だ」

その言葉を聞きながら俺は意識を失った

勝算はマイナスパーセント

>勝算<

後頭部を木にぶつけて気絶していたらしく、ズキズキする。まわりも木だらけなので林の中まで飛ばされたのか、と予測する。少しどの程度気絶していたのかと、心配になるが、日の落ちていないことを見ると、まだ時間はまだあるようだ。

「いてえな、覚えてろよ」

ひとり呟く

相手の姿はもうないので学生証は奪われたのだろうカバンの中に入っていたので鞆も取られたかもしれない

「あ、気が付いたんですか
死んだらどうしようかと思ってたんですよー」

笑顔で怖いことを言うやつだな

「大丈夫だ、あ、カバン拾ってくれたのか」

どうやら鞆までは取らなかったらしい
さすがに犯罪になるかと思ったのだろうか
確認するとやはり学生証は入ってなかった
しかし藁人形とくぎと札があるのは良かった
これは作るのに時間がかかるからな

「あの、これからどうするんですか」

心配そうな顔をいて聞いてくる

そういえばこいつはなんでついてくるのだろうか
俺に利用価値などほばないはずだ

ん？ こいつはカバンを拾ってくれたんだった
なるほどこういうやつは好きだ

正直、親切とか正義とかは大嫌いだからな

「どうしたんですか？」

「いやすこし考え事をしてただけだ。」

それよりあの始業式であいさつしていた奴の名前ってなんだか解るか？
「」

「えっと、千代 緋色さんだったはずです。」

「よし、そいつはどこにいるかわかるか。」

待つてください、といって林の中を出ていく。

「分かりましたよ、あっちのほうですね。」

いや、いくらなんでも分かるの速いな！

だが、どうやら驚きが顔に出ていたらしく、
強い人は、力みたいなのがわかりやすく出ていて
遠くからでも見えてしまうらしいとなぜか言い訳をするように説明
してくれた

「そこに行くぞ。」

「ええ！ その人試験で最強って言われた人じゃないですか
その人のところ行くって、行っても勝てませんよ！」

「俺がこの試験に受かるためにはそいつしかない。」

ケータイを取り出してそいつの記事を表示する
見出しは天才、千代緋色の秘密に迫るだ。

勝つと考えるとこいつしかない。
他に血液型も生年月日も好きなものも嫌いなものも
分かるやつがいるとは思えないからだ。
って嫌いなものはきゅうりか、意外だな。

だが都合のいい情報だけではなかった。
本来喜ぶべきなのかもしれないが、
その記事には彼女の能力も記されていたのだ。

そう、核兵器でもびくともしない鎧と、
ダイヤモンドを豆腐のように切り刻む剣を出現させる
能力のことか。

メイド怖いよー

俺は鈴木サチの案内で、林の中を進んでいた。

それにしてもこの能力は便利である。何しろ能力者であれば、近づいてくれば

相手より先に気付くことが出来る。これによって林の中を進んでいる俺たちは一切の敵に会わず進んでこられている。

確かに、ほかの使い道は？ と聞かれるとかなり困るが、ダンジョン系RPGならパーティに一人はほしいキャラクターだろう。

それに、話によると、能力が才能として開花しても気づかなかったり、

間違った解釈をする人も少なくないらしい。

俺にはない可能性だがこいつには少なからず残されていることだろう。

「む、前方に力の反応です。ここは迂回しましょう」
実に便利だ。そういえば能力の名前は勝手に決める奴が多いらしい。

魔法だと早い者勝ちなのだろうが、超能力とか、それ以外の特殊なものなら、

自分だけの名前を勝手につけるのだ。

俺はこいつの能力をこっそり心の中で、能力者発見器となすけた。そういえば、俺をのしたあのもっさり坊主頭は、自分の能力を黄金の右とか言っていた。

あれは超能力だ。

超能力は、予備動作のあまり必要のない力の全般だ。
これは魔法と比べると力は弱く、精神力が力の源となる。

基本としてスプーンを曲げるくらいならだれでもできるらしい。

ちなみに、魔法はこれも精神力が力の源となるが、それによって作った文字をもとに、そこに自分の言葉を乗せて発動する

またそれも大きく二つに分けられ、純粹な力だけを発現する人と、物や獣を召喚する人がいるのだ。

だがこの二つに当てはまらない奴もいる。

それは、精神力に影響されない力を持つ人だ。

例えばこいつはそれなんじゃないだろうか、見るからに、気合を入れると良く見えるって類ではないだろう。

その時、先行していた鈴木が手招きしてきた。

「見えましたよ。」

なるほど、あれが緋色が、長い髪に銀の鎧をまとっているのだからやすい。

「よし、とりあえず様子を見るぞ。」

「いえっさー」

なかなか乗りのいい奴だな。

しかし問題はこれからどうするかだ。

「そこにいるのは誰だ！」

なるほど、もう見つかったらしい。

「挑戦者か、ふっふっふ、やっと私の力を見せる時が来たようだ。

さつきからメイドにばかり倒されて私戦ってないから、この時を待ってたのさ！」

迷子になったのは良い誤算だったな笑う緋色。

なんか思ったのと違うが、こいつが緋色に間違いない。

だが、あのもつさりのように、いきなり襲いかかって来ないだけかなりいい相手だ。

「私の名前は、千代緋色いざ勝負だ！」

前言撤回だ。

緋色がとうつと手を大きく振ると剣が現れた。

それがダイヤをバッサバッサと切れる剣か、

「とうつ」

投げた！！

「あぶねっ」

とつさに避けたが、後ろにある気がバッサバッサと切られていく。
これはやばい。

「つてかあつたたらどうすんだ！ 馬鹿か！！ 死ぬ！！」

噛んだ。しかしそんなことにかまってられない。

正直この相手に俺が勝つにはまだ一つ足りないものがある。

今は時間を稼ぐしかない。

「避けたらいいんじゃないか。ていつ」

また新たに2本の剣をあれは召喚だろうか手品のようにぽつと出して、

投げつけてくる。木の陰に隠れようにもまったく何もなかったように切って進んでくる、

剣にどう対応すればいいのだろうか。

それに相手も投げ方が素人だが俺も素人だ。

これは当たる。そして死ぬ。

ああ、左の腕が熱い。かすただけでも切れ味が切れ味なのかかなり痛い。

「いつてえな」

だがうずくまっている暇はない。

えい、とかほいつ、とか言つて剣を投げってくる殺人鬼がいるのだ。

俺も伝家の宝刀を出す時が来た。

鞘から素早く札を取り出しそこら辺の木に張り付ける。

「む、なんだそれは、私の名前が書いてあるな」

これは、気になる札という我が家伝統の中でも俺が、呼びこの呪いから派生させたオリジナル

これに名前を書かれるときになってしょうがないという代物だ。

「えいつ」

緋色は掛け声とともに木ごと真つ二つに切ってしまう。
あれ作るのにかなり時間かかるのにな…

打ちひしがれている時間はない。

どうやらあれは効果が薄いようだ。

今度は木の札と五寸釘それに俺の血を垂らす。

これでインスタントノックされるドアだ。

ノックされるドアとは相手を不眠症にする呪いだが、

インスタントにすることでただの音がする板となる。

しかし物は使いようだ。茂みに隠れながら思いつきりそれを投げる。

聞こえなかったらそこで終わりだがあれは作るのに1時間と30分

そして俺の血が必要だからぜひ役立ってほしい。

「あつちか、えい、とうつ」

どうやらうまくいったらしいあらぬ方向に剣を投げつけている。

どうだこれが呪いの力だ。みんなもやってみるといい。

準備にかなり時間がかかるが。

誰だ、今他のもので代用すればいいとか言った奴は！

そうじゃないだろ！ 泣くぞ！

「見つけましたよ。すごく大変でしたー」

サチが戻ってきたこいつには緋色の髪の毛を探してもらっていたのだ。

見つかるかどうかは賭けだったが、こいつの能力で何とかなったらいい。

ふっふっふこれで完璧だ。

呪いってのは準備さえ完璧であればかなりの力を発揮する。

藁人形 特別性の釘 相手の髪の毛 名前 星座 そして

人体のツボの知識さえあれば誰にでもできる。

素早くわら人形にそれらを書き込み、髪の毛を括り付ける。

これで呪いのわら人形の完成だ。

しかし、実際は君たちの思っているような効果は呪いのわら人形に

はない。

これは、藁人形にくぎを刺すとそこに対応した体の部位が注射に、刺されるぐらい

一瞬いたってなるのだ。

これだけ準備してこの効果かよ、と言いたくなるがこれが今の俺の全力だ。

だがこの角度で、ここにくぎを突き刺せば…

「えっなにこれ、えっ、あっ」

緋色の戸惑うような声が聞こえる

成功した！

「よし、いまだ！ あいつの鞆から学生証を奪うぞ」

「えっなにがおきたの？」

俺が今やったのは、足がしびれるツボを刺してやったのだ。

ダメージとしてはほとんどゼロだが、この使い方なら、1時間は動けまい。

呪いの勝利だああああ

みたか殺人鬼め！！

「き、気合だああ」

起き上がった！？

「学生証はすでに奪った、ぜ、全力で逃げろ」

「いえっさー！！」

「それでお嬢様は迷子になったあげく、そこで足を抱えて何をやっているのですか？」

メイドが怖いよ

「えっとなんか、足つつちゃったみたいでなんかめちゃくちゃ痺れてて・・・」

「それであなは、学生証も8枚はあったはずなのにすべて奪われ

たと

メイドが怖いって

「いや、なんか事故っていうかその…ごめん」
平謝りするしかない私、だって怖いもん

「まあここに来る間に12枚は奪って来たので大丈夫ですけど、
さっすがケルベロスさんです。」

っていうか私ってやつば足手まといだったのかな

「終了までここで隠れながら、教育係として説教しますね」
あと二時間あるんですけどー

メイド怖いよ――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682y/>

最弱の英雄伝

2011年11月30日20時49分発行